

上ノ国町

豊田西遺跡

—— 豊留地区道営農地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和 60 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

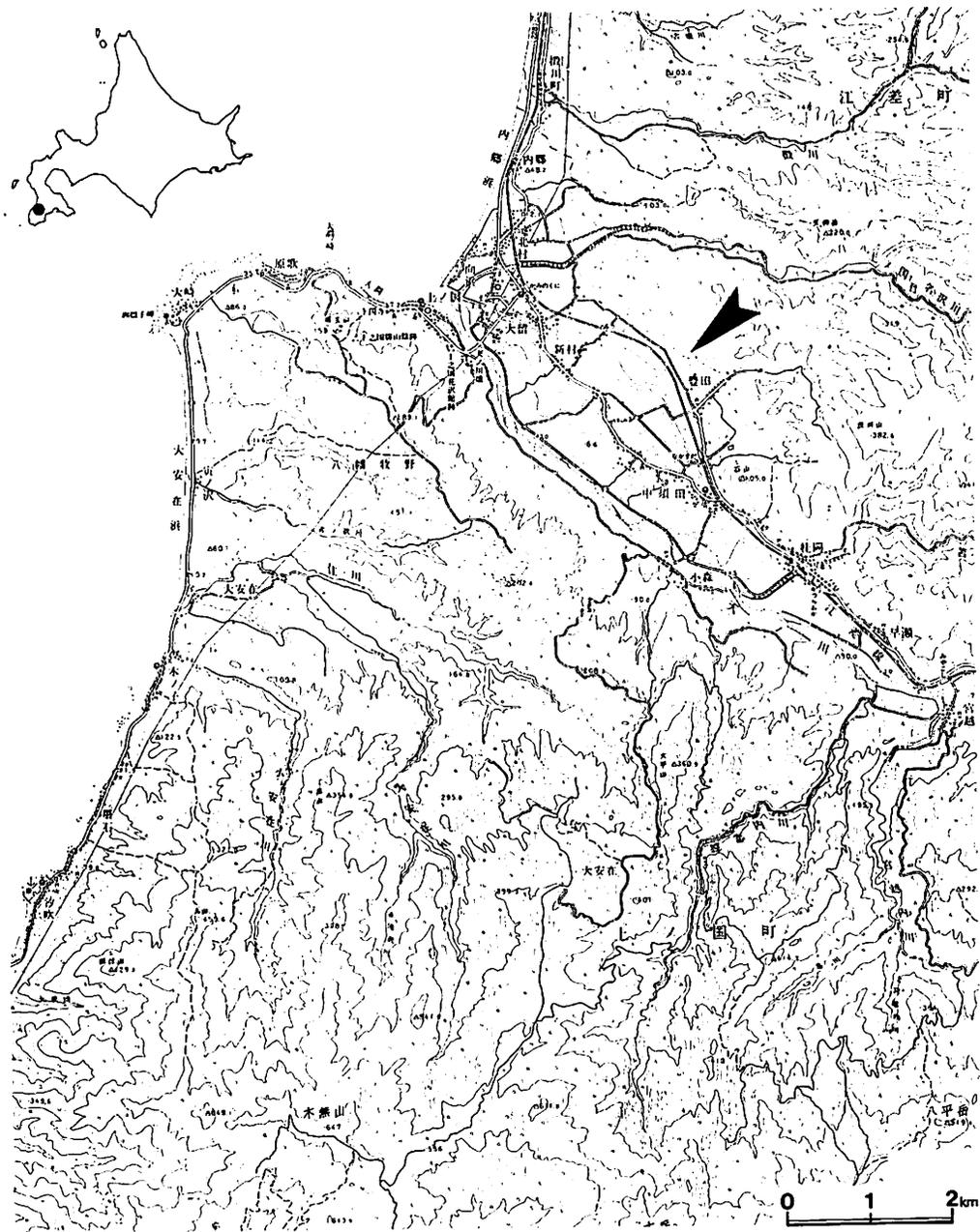


図 I 遺跡の位置

(この図は国土地理院発行の5万分の1地形図「上ノ国」を複製使用したものである。)

目 次

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査に至る経緯	1
II	遺跡の概要	1
1	遺跡の立地と環境	1
2	基本層序	3
III	遺構と遺物	4
1	Tピット	4
2	遺物	5
a	土器	5
b	石器	7
IV	おわりに	8

挿図		写真図版	
図 I	i	写真 I	10
図 II	2	写真 II	10
図 III	3	写真 III	10
図 IV	4	写真 IV	11
図 V	6	写真 V	11
図 VI	7	写真 VI	11
図 VII	8	写真 VII	12
図 VIII	9	写真 VIII	12
		写真 IX	13
		写真 X	13
		写真 XI	13

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 豊留地区道営農地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道檜山支庁
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 豊田西遺跡（北海道教育委員会登録番号：C-02-83）
所在地 北海道檜山郡上ノ国町字豊田239-1ほか
調査面積 1,100㎡
調査期間 昭和60年6月1日～昭和61年3月29日
（発掘期間 昭和60年7月15日～8月3日）
（整理期間 昭和60年11月4日～昭和61年3月29日）

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長	植村 敏	調査部長	中村 福彦
専務理事	山本 慎一	調査第三班長	鬼柳 彰（発掘担当者）
常務理事	藤本 英夫	文化財保護主事	佐藤 和雄
業務部長	間宮 道男	嘱託	谷島 由貴

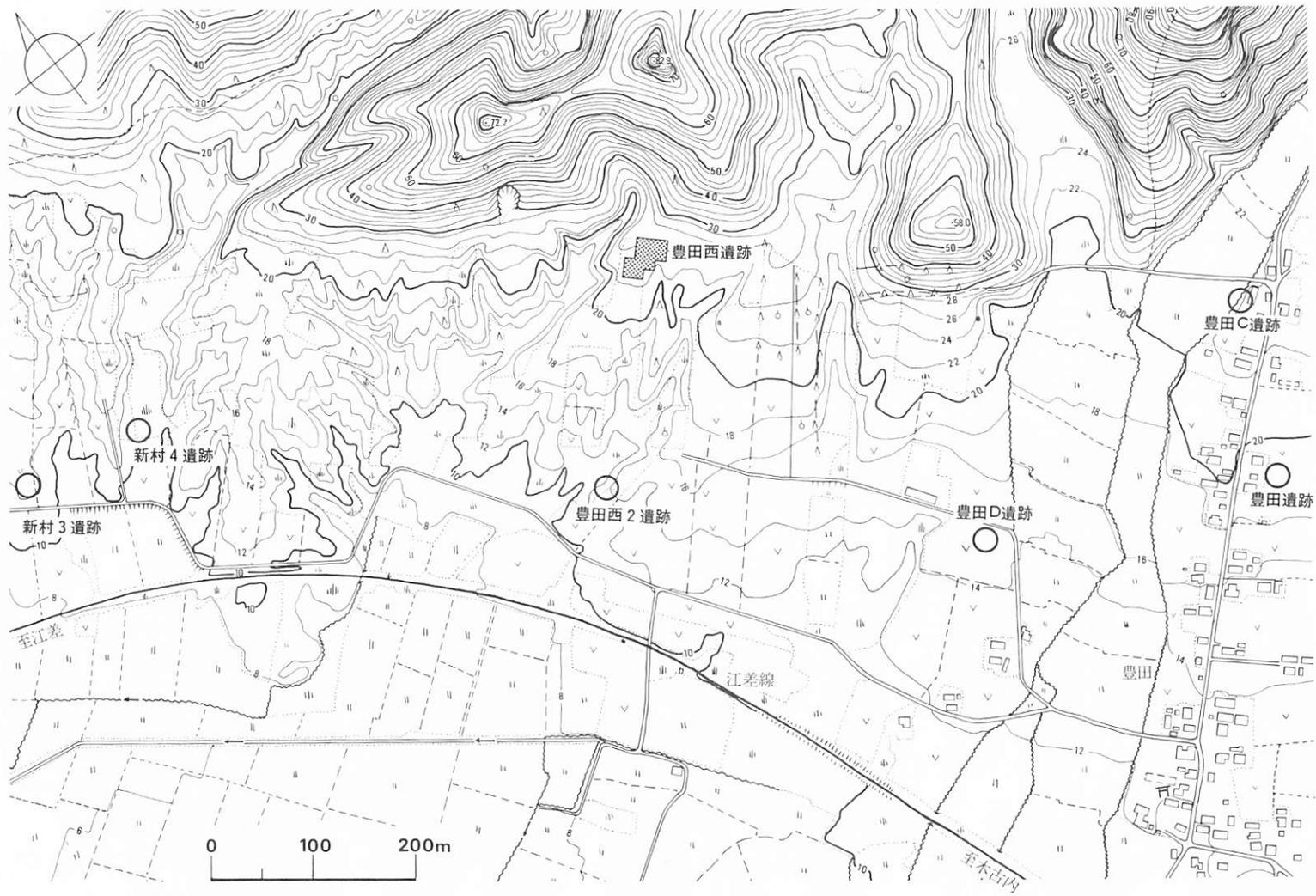
3 調査に至る経緯

檜山支庁は昭和59年度より4ヵ年計画で上ノ国町字大留から豊田地区において道営農地開発事業を進めている。事業内容は約42ヘクタールに及ぶ農地造成である。事業計画の策定にあたり檜山支庁は昭和57年10月、北海道教育委員会と埋蔵文化財保護のための事前協議を行った。同教育委員会は工事予定地区に新村1遺跡があり、周辺にもいくつか周知の埋蔵文化財包蔵地があることから翌58年6月、所在確認調査を実施して、本遺跡を含め新たに5ヵ所の包蔵地を発見した。範囲確認調査は、昭和59年に3次にわたって行われた。これらの包蔵地のうち豊田西遺跡は再度の協議の結果、計画変更ができないことが明らかになったため、昭和60年秋の工事着工に先立って発掘調査を実施したものである。（鬼柳 彰）

II 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境

本遺跡は上ノ国町を南東から北西へ貫流する天ノ川の下流右岸より北東約2kmのところに位置している。ここは東側の茂刈山（382.6m）からつづく緩やかな丘陵の南側裾部と天ノ川につづく平坦部との境にあたる。調査地区は浅い沢にはさまれた標高22～25mの低い台地上にある。周辺の低地には、このような沢がところどころあって伏流水が湧き出し、平野部の水田をうるおしている。記録によると明治時代まで本遺跡付近の丘陵部は原始林がうっそうと茂っていた。また低地は至るところ湿地となって葎や萱が繁茂しており、この一帯は「大谷地」と呼ばれていたという。明治13年頃から江差の商人・土族が小作を入れて開墾を始め、灌漑溝・



図Ⅱ 地形と周辺の遺跡

排水溝を掘って田畑がつくられるようになった。現地の地名「豊田」は昭和10年に字名改正されたものである。豊田から上ノ国市街に近い新村にかけて、この丘陵裾野には、縄文時代後期から晩期の遺跡が多数分布している。(谷島由貴)

2 基本層序

基本層序は以下のとおりである。このうちおもな遺物包含層はV層であるが、IV層中からもわずかに遺物が出土した。

I層：灰黒色土：表土。8～15cm。

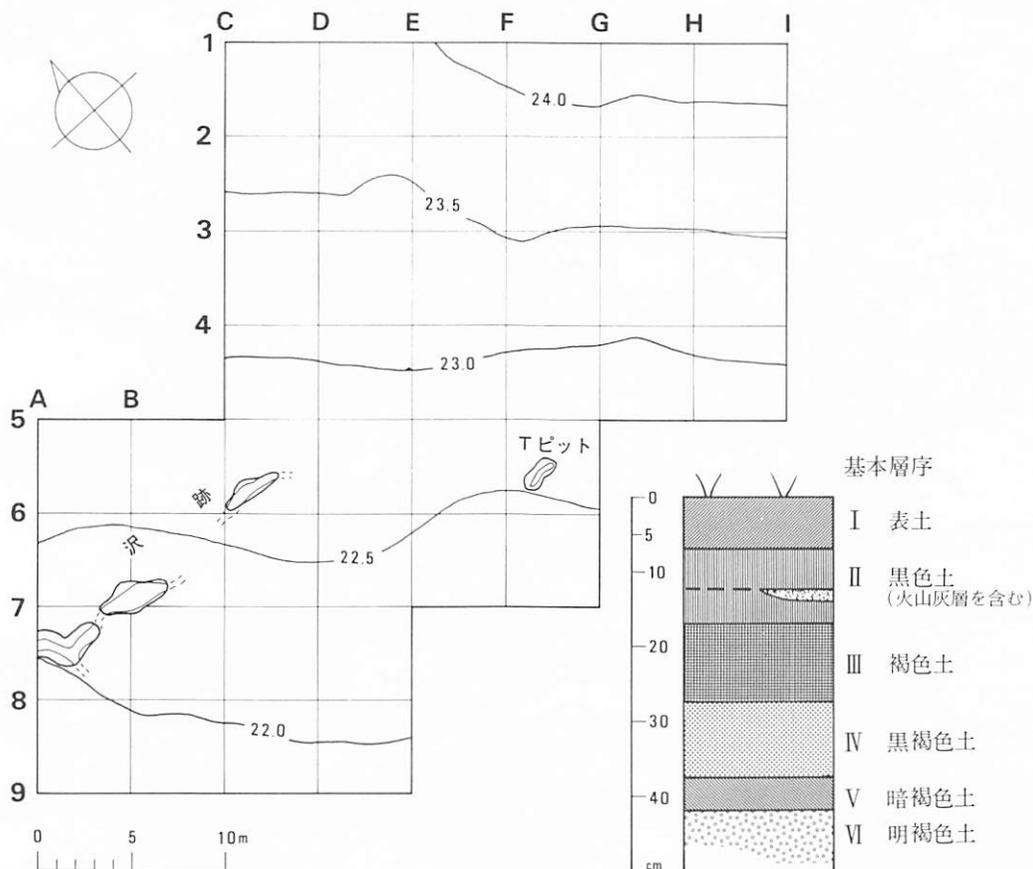
II層：黒色土：5～10cm。ところどころに明灰褐色の火山灰層が混入しているが、分層はできなかった。この火山灰は窪地に堆積したものと思われ、10cmほどの厚さになるところもある。噴出源は渡島大島または駒ヶ岳ともいわれているが、詳細な分析は行われていない。

III層：褐色土：5～12cm。東側では堆積していないところがある。

IV層：黒褐色土：やや粘質である。5～15cm。

V層：暗褐色土：漸移層。2～5cm。

VI層：明褐色土：ローム層



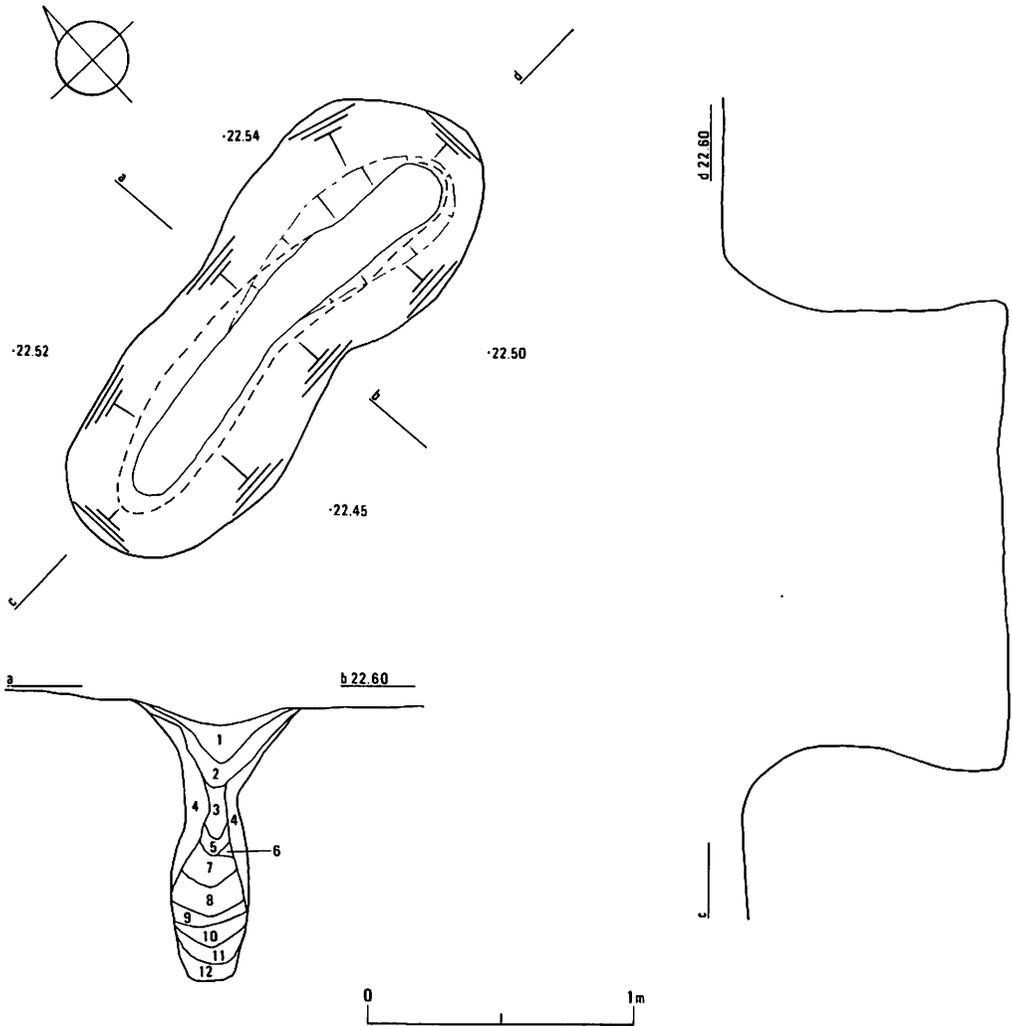
図Ⅲ VI層上面の地形(グリッドの呼称は左上の交点)

Ⅲ 遺構と遺物

1 Tピット

調査区南端，グリッドF-5のⅥ層上面で確認された。

確認面での長軸方向は2.04m・最大幅0.82m・深さ1.04m，壙底はほぼ平坦で，杭跡などは検出されなかった。断面形は中間がふくらんでおり，土層断面をみると黒色土と黄褐色ロームが互層になっている。上部には基本層序のⅣ層・Ⅴ層と同様の土が入っている。（谷島由貴）



Tピット土層

- | | | |
|-------------------|--------------------|------------------|
| 1. 黒色土 | 5. 暗褐色土(3より明るい) | 9. 暗褐色土(8より明るい) |
| 2. 黒褐色土 | 6. 褐色土(ロームと黒色土混合) | 10. 暗褐色土(9より明るい) |
| 3. 暗褐色土(ローム混入) | 7. 暗褐色土(ロームブロック混入) | 11. 褐色土(ローム混入) |
| 4. 褐色土(ロームと黒色土混合) | 8. 暗褐色土(7より明るい) | 12. 褐色土(11より明るい) |

図Ⅳ Tピット

2 遺物

a 土器 (図V・VI, 写真VII・VIII)

今回の発掘調査で出土した土器は393点、すべて破片である。大部分が縄文時代後期前葉の大湯式土器に相当するものである。このほかに、縄文時代後期末葉の堂林式土器に相当するものが数点出土している。このうち器形を推定できたものは2個体のみである。

縄文時代後期前葉の土器

無文の深鉢型土器 (1・2)

1はB-5から出土。図は破片から推定した器形である。推定口径は約16cm。頸部がくびれた平底の深鉢型土器である。胎土には細かい砂粒を多く含んでいる。器厚は6～7mm前後。横位の調整痕が内面のくびれ部に残っている。

2はD-2～5・F-2・3に散布していた。図は破片から推定した器形である。推定口径は約19cm。口頸部がくびれ、胴部がふくらんだ深鉢型土器と考えられる。内外面ともに横位の調整痕がみとめられる。口唇部は丸い。焼成は良好。頸部内面に炭化物が付着している。

粘土紐の張り付けや沈線による文様がある土器片 (3～22)

3は細い粘土紐を内から外へ半円状に貼付けている。4・5・6は同一個体。口唇部突起に粘土紐を貼付けている。口縁部から胴部にかけて横走る沈線と斜めの沈線によって構成された文様がある。7は小型土器の口縁部。口唇部にキザミ、器面には曲線による文様がある。8は口唇部に半月形の刺突文があり、口縁部に深い沈線を2条施している。9は山形の口縁部に折り返しがあり、頸部の2条の沈線より上が外反する小型土器の破片である。10は口縁部突起の破片。浅く細い沈線がある。11は胎土に1～2mmの粗い砂粒を多く含む胴部破片。カニのはさみの様な沈線文様がある。12・13・14は同一個体の胴部破片。平行する沈線で文様を描き、その間の地文を磨り消している部分がある。15と16は胴部破片。横走る沈線を施している。17・18・19は同一個体の胴部破片。2条の横走る沈線の間に蛇行する沈線を連続施文している。20・21・22は同一個体の胴部破片。沈線で区画した内側に半月形の刺突文がある。

地文のみの土器片 (23～30)

23は口唇端部が平坦。地文はLRの斜行縄文。25・26は同一個体の胴部破片で、胎土に2～4mmの粗い砂粒を多く含んでいる。地文はLRの斜行縄文。内面に炭化物が付着している。27の原体はRの捺糸文。内面に縦の調整痕がみられる。28は粗い繊維を原体としたLRの斜行縄文。内面に縦位の調整痕がある。29・30は同一個体の胴部破片で、1～3mmの粗い砂粒を含んでいる。地文はLRの斜行縄文。焼成は良好。

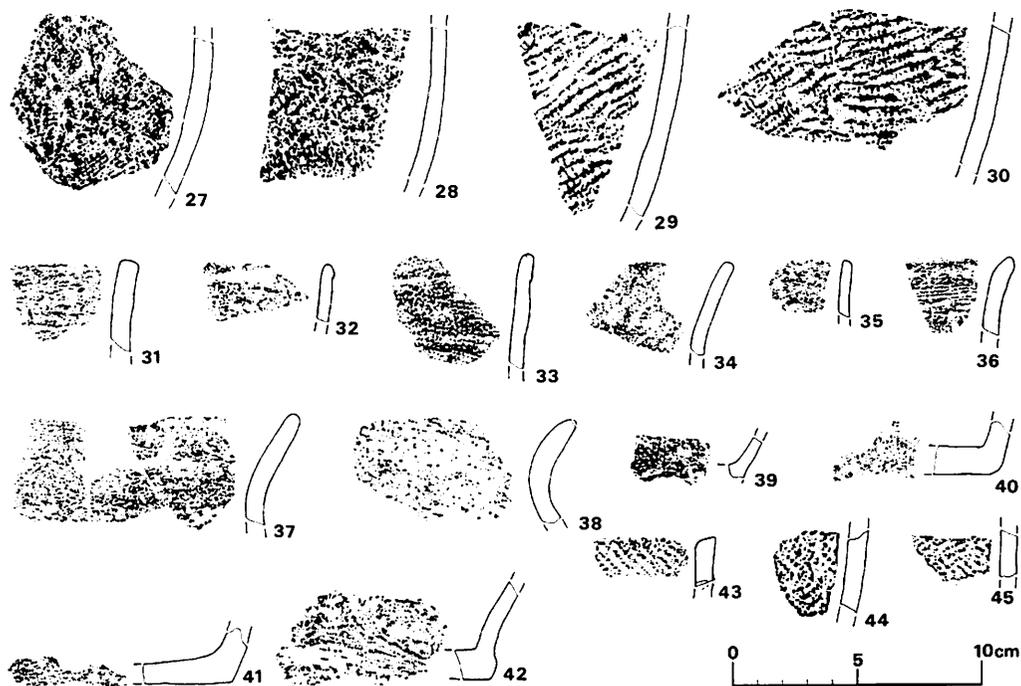
無文の土器片 (31～38)

すべて口縁部破片である。31は口唇端部が平坦だが、このほかのものは丸い。32と33は外面に折り返しがある。36はクシ状工具による横位の調整痕が口縁部にある。37と38は外反している。

底部の破片 (39～42) 39は小型の土器である。42は底部が外に張り出している。



图V 土器



図Ⅵ 土器

縄文時代後期末葉の土器片 (43～45)

同一個体の口縁部と胴部破片。口唇部は平坦で外面に突瘤文がある。堂林式土器に相当する。

b 石器 (図Ⅶ, 写真Ⅸ)

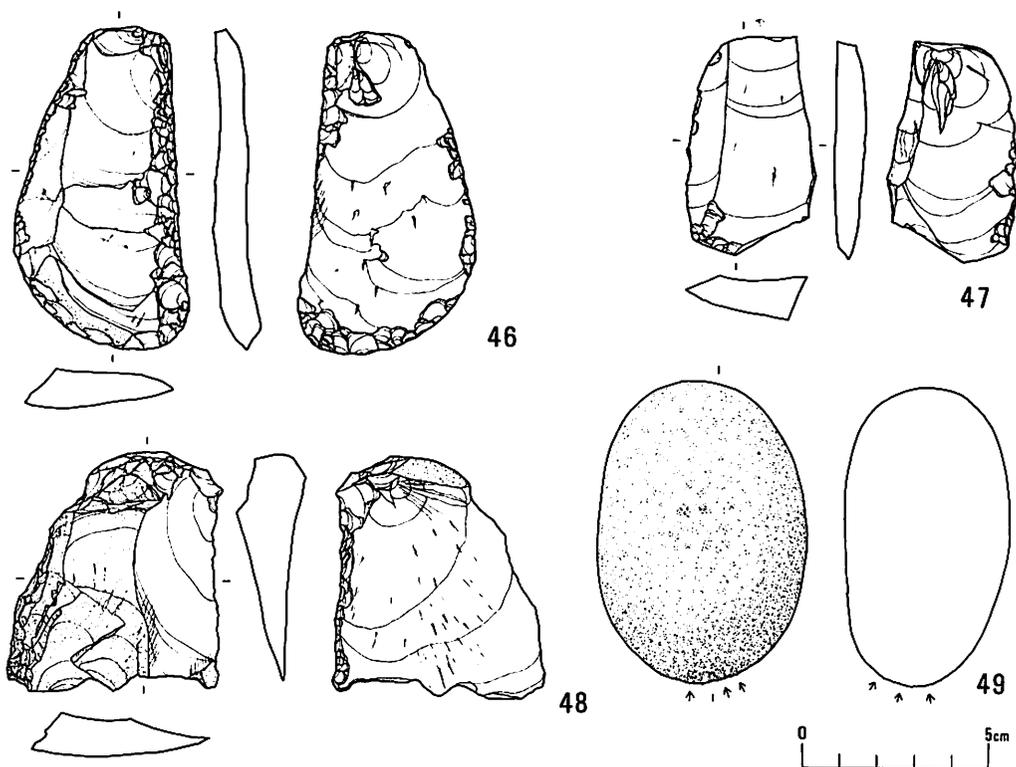
スクレイパー 3点・たたき石 1点・剝片 21点が出土した。たたき石以外はすべて頁岩である。直接接合したものはないが、肉眼観察では、このうちの剝片 7点と図Ⅶ-47のスクレイパーは同一母岩からとられたものと推定される。

スクレイパー (46～48)

46はD-7から出土。重さ48.1g。二次加工痕が縦長剝片の両側縁と下辺の一部にある。47はE-1から出土。重さ27.7g。二次加工痕が縦長剝片の一侧縁と下辺にみられる。側縁の二次加工による剝離は、上半と下半では反対方向から行われている。48はC-3から出土。重さ49.8g。二次加工による刃部の形成が幅の広い剝片の一侧縁にみられる。原石面が残っている部分から判断すると、この母岩は角礫であったことが推定できる。

たたき石 (49)

E-4から出土。重さ29.5g。縦断面が楕円の礫の一端にたたき痕がある。素材は安山岩である。(谷島由貴)



図Ⅵ 石器

Ⅳ おわりに

発掘されたTピットは本遺跡が立地する低い舌状台地南東側の沢に近い部分にある。Tピットは短軸方向に一定の間隔をおいて列をなす調査例が数多く報告されている。今回発掘されたTピットは短軸方向が舌状台地ののびる方向に直交しており、南東側の沢に向って列をなして続く可能性がある。

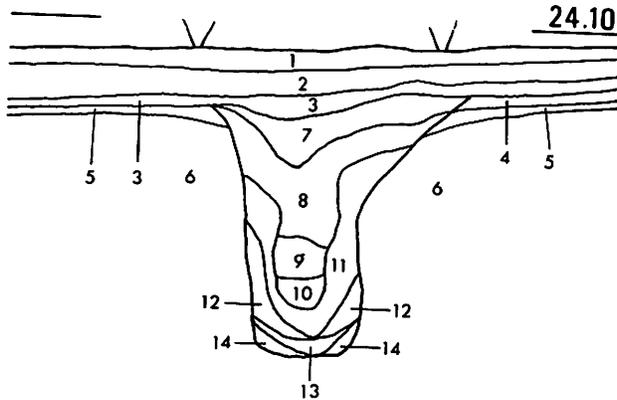
遺物は剥片類を含めて400点あまりで、このうちの大部分は調査区北半部の中央付近から、調査区西南部にかけて出土した。しかし一ヵ所にまとまって出土したものは少なく、点々と散布している状態であった。

調査区西南部には埋没したU字状の沢跡があった。これは3ヵ所に分かれてⅢ層上面あるいはⅣ層上面で確認されたもので、それぞれ長軸方向の下部がトンネル状になって相互につながり、この延長上にある調査区外西側の小さな沢に続いている。調査区は伏流水が地上に湧き出す沢頭の手前あたり、地下水が地表近くを通る部分が落ちこんでこのような地形になったものと考えられる。土層断面をみると黒色土と黄褐色ロームが互層になっており、Tピットの層序にきわめて似ている。埋土中からは堂林式土器に相当する土器の小片が2点出土した。確認された層位からみると、Tピットが掘りこまれた時期よりは新しいが、縄文時代後期末にはすでに上部が落ちこんで、このような地形になっていたことも考えられる。

調査区周辺の地形をみると、遺跡が立地する低い舌状台地周辺は山裾の急斜面あるいは沢・湿地帯になっており、本遺跡は調査区の東側に続く標高24~28m付近の比較的平坦な部分まで広がっているものと考えられる。遺跡の主体はむしろこの部分にある可能性が高い。

(鬼柳 彰)

図Ⅷ 沢跡の土層断面



沢跡の土層

- | | | |
|-----------------|-----------------------|------------------------|
| 1. 灰黒色土(基本層序 I) | 6. 明黄褐色土(基本層序 VI) | 11. 暗褐色土(同上11よりロームが多い) |
| 2. 黒色土(" II) | 7. 暗褐色土(黒色土とロームの混合) | 12. 暗褐色土(褐色土とロームの混合) |
| 3. 褐色土(" III) | 8. 暗黄色土(ロームと少量の黒色土混合) | 13. 暗黄褐色土(褐色土とロームの混合) |
| 4. 黒褐色土(" IV) | 9. 暗褐色土(ロームブロック混入) | 14. 黒色土 |
| 5. 暗褐色土(" V) | 10. 暗褐色土(同上9よりロームが多い) | |

引用・参考文献

松崎岩穂(昭和31年)『上ノ国村史』上ノ国町

松崎岩穂(昭和37年)『続上ノ国村史』上ノ国町

———(昭和39年)『上ノ国町四十九里沢A遺跡』上ノ国町教育委員会

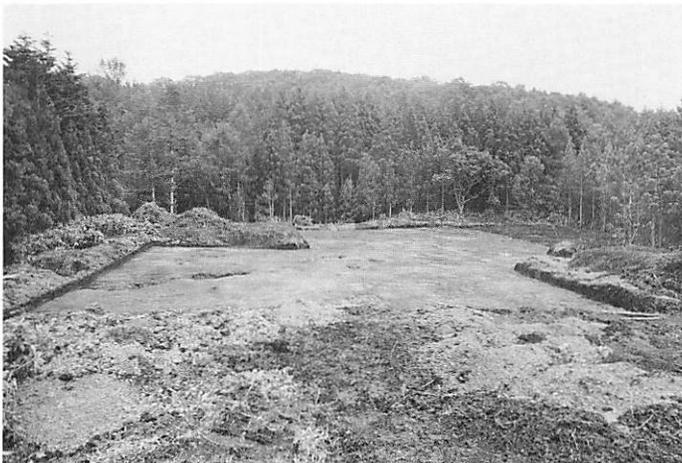
大場利夫・松崎岩穂ほか(昭和30年)『檜山南部の遺跡』上ノ国町教育委員会・江差町教育委員会



I 調査前の状況



II 調査の状況



III 完掘の状況



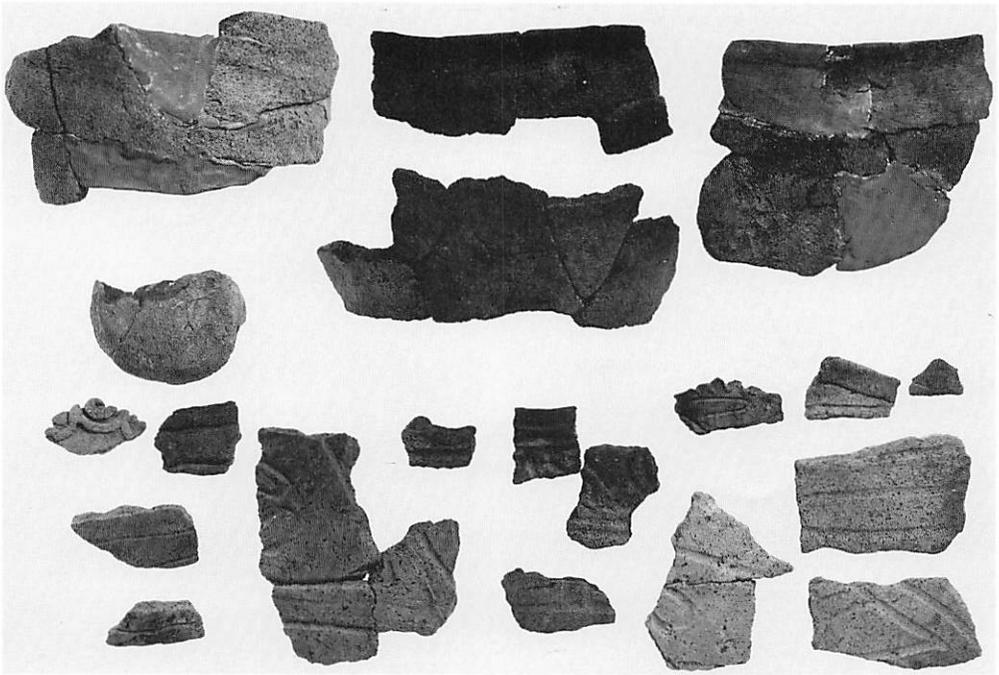
Ⅳ Tピット確認状況



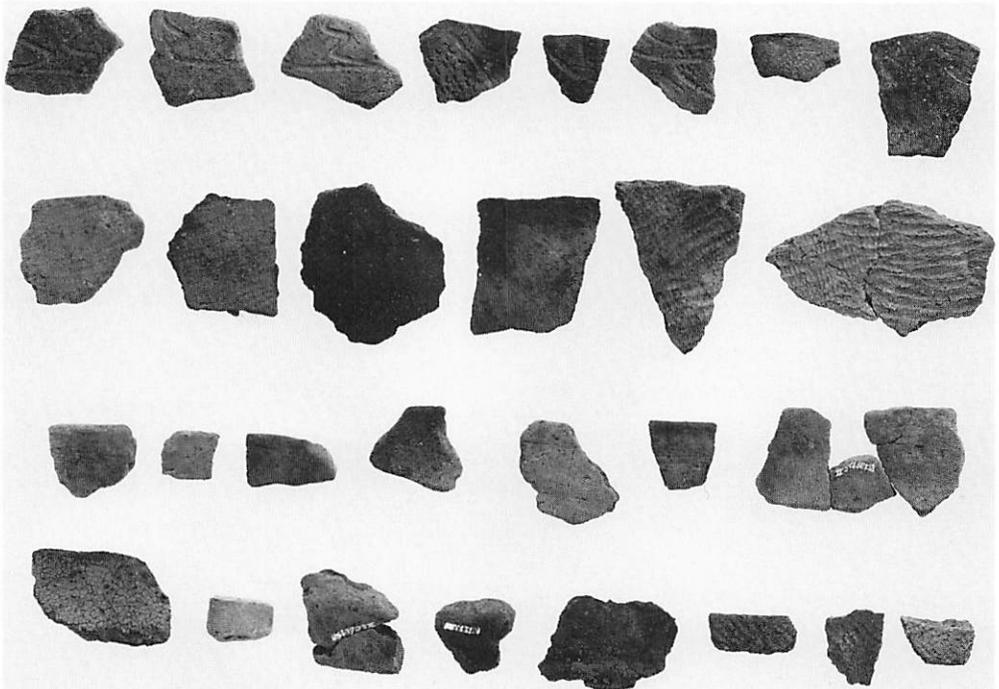
Ⅴ Tピット土層断面



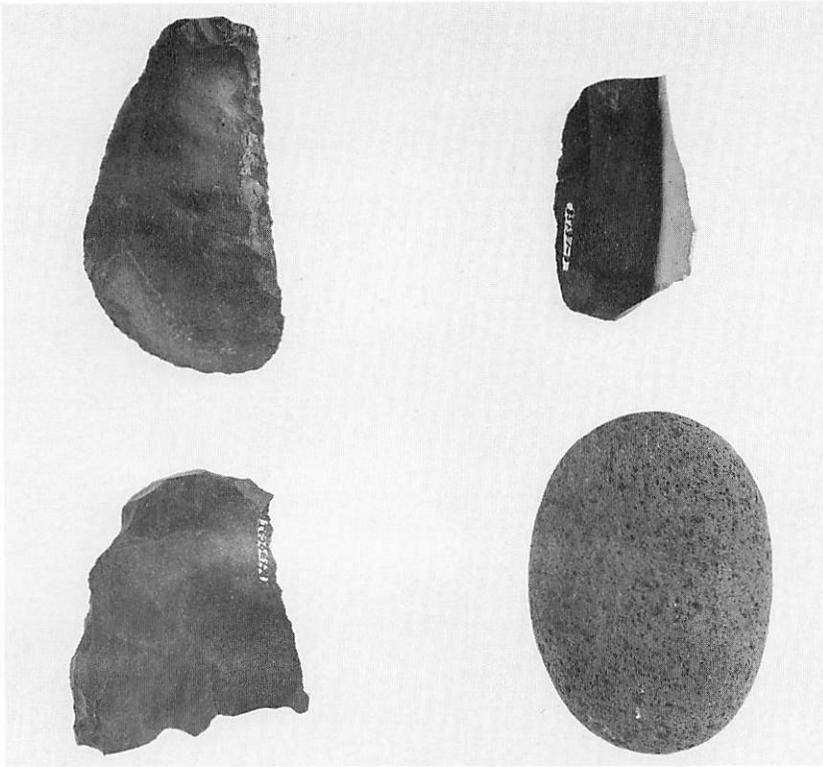
Ⅵ Tピット完掘状態



Ⅶ 土器



Ⅷ 土器



IX 石器



X 沢跡の土層断面



XI 沢跡の完掘状態



財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第31集

上ノ国町 豊田西遺跡

—豊留地区道営農地開発事業用地内発掘調査報告書—

昭和61年3月29日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

印 刷 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西9丁目



10017340

北海道埋蔵文化財センター

211.8

140

31